

色川 大輔 提出 学位申請論文

『中世以後における助動詞「らむ」』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、助動詞「らむ」に関する学説史を整理し、その上で、中世以後の助動詞「らむ」について考察した論文で、序章「はじめに」、第一部「研究史に代えて助動詞「らむ」の解釈史について——松尾捨治郎の論を中心として——」（全三章）、第二部「中世撰集における助動詞「らむ」をめぐって」（全三章）、第三部「今川氏真の詠作における助動詞「らむ」について」（全三章）、および附章、終章の全三部、十二章から成る。

序章では、まず、助動詞「らむ」についての問題点として次の三点を示す。(一)松尾捨治郎が「らむ」を二種四類七様に分類していることと、今日の研究における「らむ」の標準的な記述とが、どのような関係にあるのか。(二)『古今和

歌集』第八四番歌に代表される「らむ」について、疑問副詞を補う必要はないと主張した松尾捨治郎の説はなぜ排斥されたのか。(三) 時代が下ると「らむ」と疑問詞との共起例が増えるという松尾捨治郎の調査について、この傾向は中世以後どのような様相を示すのか。そして、本論文はこの三点を解明したいという欲求から発生したとする。

第一部は、助動詞「らむ」をめぐる学説史を整理し、考察を加えたものである。

第一章は、『古今和歌集』第八四番歌「久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ」に代表される、疑問副詞を補って解釈される「らむ」について、その学説史をまとめたものである。近世以前には疑問語を挿入する説が大勢であったこと、疑問語の挿入を退ける所説も少数存すること、あくまでも文中に「らむ」の焦点を求める三矢重松、松尾捨治郎の所説が「新説」として提案されたこと、この「新説」が「らむ」の「推量」の概念規定の検討に寄与したことなどを記述する。

第二章では、「新説」では解釈出来ない例が存するという批判について、その

用例を調査する。その過程で、「それで」のような原因・理由の条件節を補って解釈することを主張して「新説」を批判するものがあることを確認し、これは、批判とはいいながら「新説」と相似の論を展開しているものであることを指摘する。

第三章では、「新説」に加えられた批判を六類に分類し、研究史上重要なものは、(一)「新説」では解釈出来ない例があるとするもの、(二)「らむ」の焦点は、疑問副詞や係助詞などによらずに表示出来るものではないとするもの「二つであるとする。この批判により、松尾捨治郎の提示した「甲」「乙」両類の区分は修正され、「乙」の識別は焦点作用を起こす語の明示に依存するものと考えるべきであり、助動詞「らむ」の推量の作用として二分類があると考えるべきではないと主張する。

第二部は、「らむ」と疑問語との共起の有無を調べた松尾捨治郎の研究が、てにをは秘伝書の記述の背景をうかがうための方法として有意義であるが、中世以降の調査がないとして、これを補うことを企図したものである。第四章では、

最後の勅撰和歌集である『新統古今和歌集』（の和歌、以下同じ）における「らむ」と疑問語との共起の有無を調査する。その結果「らむ」と疑問語との共起は九四％にもなっており、このような高率が中近世の歌学の「らむ」の記述につながるとする。

第五章では、「家の三代集」と称される『千載和歌集』、『新勅撰和歌集』、『続後撰和歌集』における「らむ」を調査する。「らむ」の全三用法と疑問語の有無との総ての組み合わせがみられ、中世以後の和歌の宗とされる「家の三代集」の面目が認められるとする。

第六章では、十四世紀末頃に編まれた私撰集『菊葉和歌集』の「らむ」を調査し、「らむ」の使用率が低く、京極派の撰集と共通する特徴を示すこと、疑問語との共起意識は有していることを指摘する。そして、この京極派の「らむ」への関心の低さをみると、京極派が『姉小路式』の「はねてにはの事」の記事を生むとは考えにくく、『姉小路式』の担い手は二条派の人々ではなかったかと思える。

第三部は、中世後期擬古文資料の一例として、今川氏真の詠作に使用された「らむ」について検討したものである。

第七章は、戦国大名でありかつ非専門歌人である今川氏真の詠作について、第二部で用いた方法を適用することで、その資料的性質を測ることを試みる。その結果、「らむ」と疑問語との共起は、中世期の勅撰和歌集に比べて、一割程度低いこと、特に今川氏真のまとまった家集のうち最大のものである『詠草中』については、勅撰和歌集に比して二割程度の低率を示すことを指摘する。そして、今川氏真が冷泉為和、為益父子に作歌の指導を受けた、“素人”の歌人であることから、「一つの憶説」としながらも、これが冷泉家流の語法を示すものではないかと述べる。第八章では、係り結びの崩壊例や、主格助詞の表示された「…の…らむ」の句型などについて調査し、「殆どは素直な推量文となっている」と結論づける。

第九章では、今川氏真の詠作中の「何おもひけむ」型の句型について、検討する。『新古今和歌集』三六番歌の解釈に、「過去」と解する東常緑ら二条派流の解釈と、

「驚嘆」と解する解釈があることを明らかにし、今川氏真は「驚嘆」の解釈を以て自己の詠作に臨んだと考えた。

附章では、『宇治拾遺物語』における係り結びの崩壊現象について調査し、「ぞ」「なむ」のそれには、「…の（が）…連体形＋なり」に並行的な句型がみられることを指摘する。

論文審査の結果の要旨

申請論文は、助動詞「らむ」の学説史を整理した上で、中世以後の和歌の「らむ」の実態を示したものである。「らむ」の学説史を丁寧に通りながら、改めて「らむ」の機能について考えたこと、中世以後の和歌の「らむ」の実態と、中世、近世初期の「てにをは書」の記述とを照合したことは、評価に値する。特に、中世以後の和歌の言語は、これまで日本語学的な調査、考察がほとんどなされて来なかった。また、「てにをは書」の研究は多いが、その記述が、同時代の和歌の

実際の詠歌と適合しているか否かを照合するという作業は従来欠落していた視点であり、この着眼点は高く評価される。

第一部は「らむ」の学説史を丁寧に通るものであるが、「らむ」のように所説の多いものについて、このような作業は必要なことである。この中で三矢重松、松尾捨治郎の提起した「新説」について改めて光を当てている。学説史の検討は網羅的になされているが、例えば大鹿薫久（一九九七）「助動詞「らし」について」（『語文』六七）など、表題に「らむ」とないものの、論考の中で「らむ」に触れているような研究にも目が配られると良かったと惜しまれる。第二章では、「新説」への批判としてなされた「さればや」「さればにや」が補われるとする説について、「文章中明示されている内容を「されば」と原因推量にする条件文を構成すると見るか、疑問副詞により疑問の不定条件文を構成すると見るかの相違になってくる」、「事ここに至ると、「新説」と「旧説」との間隔は驚くほど接近してくる」（第二章一〇一頁）と述べるが、いかがであろうか。三矢、松尾の「新説」は「静心なく」の部分を未定の事態とみるもので、文中の語句を

すべて既定の事態と把握する「されば(に)や」挿入説とは根本的に異なるのではないか。申請者は、第三章で、野村剛史の所説を主な根拠として「新説」を否定するに至るのであるが、今回整理した学説史の検討の上に立ちつつ、仮に松尾捨治郎の「新説」を固持して「らむ」の全例に当たったら、どういう風景が現れるのか、「新説」を活かすことで「らむ」の理解に新たな視点が得られないか、一度はそういう作業仮説も試みられるべきであったと思われる。しかし、今日の「らむ」の想像焦点についての理解が、「新説」を生んだ焦点整理の体系の中から発生し、「旧説」の持っていた非合理性を批判して登場した「新説」に内在する非合理性を剔抉しえたものである。」(第三章一四頁) という理解は、研究史を丹念にたどることで初めて得られた理解といえよう。

第二部は、日本語学的な調査がほとんど行われていない中世撰集の言語を調査した点に、先駆性が認められる。時代が下るごとに「らむ」は疑問語との共に傾斜してゆくことが知られているが、最後の勅撰和歌集『新統古今和歌集』では九四%にも達することを指摘する。また、その過程で中世・近世の「てに

をは書」の記述との関連を指摘したことも、新機軸といえる。今後の課題ということになるが、「らむ」以外の語法についてはどのように記述されるのか、気になるところである。また、第六章一頁に掲示されている「いづくにも衣うつなり秋風や里をばかれず夜さむなるらむ」（新続古今和歌集）はもはや「や」と「らむ」の呼応がなされず、これは「やーらむ」がセットとして形骸化したことを示すであろう。申請者はこの後、第八章で「の」や「こそ」に関心を寄せてゆくのだが、それよりも、あきらかに文語化した「や」の実態を追うべきであったと思われる。また、第六章では、京極派の「らむ」への関心の低さが『菊葉和歌集』からも裏付けられるとし、「はねてにはの事」の記事を含む『姉小路式』の担い手は二条派の人々ではなかったかと推測している。同書の二条派との関連は従来も指摘されてきたことであり、その傍証として面白い立論である。

第三部は今川氏真の詠作における「らむ」を調査したものである。今川氏真は、歌人としてはいわば“素人”（非専門歌人）であって、冷泉家に作歌の指導を受けた人物であり、このような人物の詠歌を取り上げた視点が斬新である。そし

て、「らむ」と疑問語との共起例が、中世期の勅撰和歌集に比べて低いことから、「一つの憶説」としながらも、これは冷泉家流の語法を示すものではないかと述べる。俄に賛同することは躊躇せられるが、「作風」としては京極派など顕著な特色を見せるのであり、作風のみならず、語法、特に文語化した語法にあっては、家流による差異もあるかも知れず、今後の課題として面白い視点が提出された。

以上のような本論文の成果は評価されるものであるが、特に、中世和歌の語法研究を試みた点、てにをは書の記述と中世和歌の実際の詠歌の語法を照らし合わせた点は、今後の中世文語の研究、歌学の研究に斬新な視点を提起したもののということができる。

以上により、本論文の提出者色川大輔は博士（文学）の学位を授与される資格があると認められる。

令和二年十一月二十八日

主	副	副
查	查	查
國學院大學教授	國學院大學教授	國學院大學教授
小田	諸星	吉田
勝	美智直	永弘
印	印	印

色川 大輔 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試問を行った結果、博士(文学)の学位を授与される学力があることを確認した。

令和二年十一月二十八日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	小田 勝	印
副査	國學院大學教授	諸星 美智直	印
副査	國學院大學教授	吉田 永弘	印